The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 永井荷風による館柳湾評価の背景 ： 明治期漢詩人の江戸漢詩に対するまなざし |
| Author(s) | 合山, 林太郎 |
| Citation | 語文. 2014, 103, p. 1-13 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/70940 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 永井荷風による館柳湾評価の背景

## ――明治期漢詩人の江戸漢詩に対するまなざし――

合山林太郎

### はじめに

館柳湾（たちりゅうわん）（宝暦一二年〈一七六二〉～天保一五年〈一八四四〉）は越後の人、江戸に出て亀田鵬斎に学んだ後、林述斎に従い、役人として飛騨高山などに赴任した。詩集としては、『柳湾漁唱』初集（文政四年〈一八二一〉序）、二集（天保二年〈一八三一〉序）、三集（天保一二年〈一八四一〉序）を著し、また、中晩唐を中心に多数の中国詩の詞華集を刊行した。このほか、詩文や逸事を漢籍から集めた歳時記『林園月令』を編んだことでも知られている。(1)

本稿が試みるのは、この柳湾の詩についての理解、とくに数百にのぼる彼の詩のなかで、どの作が高い評価を得たかについて、近世後期から大正期までの間の通時的な変遷を分析することにある。幾多の漢詩人のなかで殊更に柳湾を取り上げるのは、彼の詩をめぐる議論には、近世後期以降の漢詩についての認識の変遷を知る上できわめて示唆に富んでいるからである。

柳湾をめぐる議論は、これまで近代の作家永井荷風とともに語られることが多かった。荷風は、その著『改訂　下谷叢話』（昭和一四年〈一九三九〉）「第十三」において、「柳湾は江戸詩人の中わたくしの最も愛誦するものである。」（『荷風全集』〈以下、『全集』と言う〉第一五巻・一八二頁）と述べたが、柳湾の詩に対する自身の感想を、『葷斎漫筆』（くんさいまんぴつ）（大正一四年〈一九二五〉二～一〇月、『全集』第一五巻、執筆は一部大正一三年）において記している。ここで、荷風は、自身の生活体験や父禾原に関する思い出について触れながら、「秋尽」や「初冬即時」、「雑司谷雑題」などの柳湾の詩に対する自らの愛着を語っている。

ただ、このような荷風による評価は、近世期以降の様々な柳湾の詩に対する見方の一つに過ぎず、実際に荷風の見解は、それ以前の時期の柳湾理解と様々なかたちでつながっている。また、荷風研究に即して考えるならば、荷風の柳湾評価の意義と特徴は、

それ以前の柳湾理解との比較によってはじめて明らかにできると言い得るだろう。本稿では、近世漢詩史を視野に入れつつ、荷風の柳湾詩評価の意義についても分析してゆく。

## 一　江戸後期から明治期初期にかけての柳湾評

柳湾についての後世の評価を検討する前に、柳湾在世時に、彼がどのように評価され、また、どういった詩が注目されたのかについて考えてゆく。

柳湾が詩人としての名声を得る原因となったのは、菊池五山『五山堂詩話』への詩の掲載であろう。具体的には、同書の巻三（文化六年〈一八〇九〉）、巻六（〈文化九年〈一八一二〉）、補編の巻三（文政九年〈一八二六〉）[2]において、柳湾の詩が評されている。五山はこれらの文章のなかで、「二人同宗中晩、而小異其趣（二人〔筆者注　柳湾と巻菱湖のこと〕は同に中晩〔筆者注　中晩唐のこと〕を宗とするも、其の趣を小異す）」や「柳湾仕為小吏、半生為風塵所累。然吟詠不絶。和雅醞藉、似其人（柳湾、仕へて小吏と為り、半生、風塵の累する所と為る。然れども吟詠絶えず。和雅醞藉、其の人に似たり）」などと述べ、柳湾の温和で清廉な人柄や中晩唐詩に対する愛着などを説いている。

こうした柳湾像は、『柳湾漁唱』や和刻本の詩集の序跋における記述などによって増幅されてゆく。たとえば、『柳湾漁唱三集』の朝川善庵の序には「君之於詩、刻意学唐、字句欲其必全雅、平仄欲其必全協。百錬千磨、漸老漸熟。久之、融洽入変、宛然唐音矣（君の詩に於けるや、刻意、唐を学び、字句は其の必ず全て雅ならんことを欲し、平仄は其の必ず全て協はんことを欲す。百錬千磨、漸く老い漸く熟す。之を久しうして融洽し変に入り、宛然たる唐音となれり）」と記されている。この文章に見られるような、唐詩を貴び、入念の字句を推敲するという柳湾のイメージが人々の間に浸透し、それはより後の時代の柳湾に関する記述にも影響を及ぼしたと考えられる。

一方、柳湾のどの詩を評価するかについては、明確な方向性が見られない。詞華集における収録状況から、その様相を探りたい。

存命中、柳湾はいくつかの詞華集に作品を寄せている。全国規模の詞華集『采風集』（文化四年〈一八〇七〉刊）や、越後の詩家によって編纂された『鴎盟集』（文化一一年〈一八一四〉刊）、『北越古今詩選』（文政六年〈一八二三〉刊）、また、弟の巻菱湖の手になる『篋中集』（文化一三年〈一八一六〉序）、発行した時期の元号を書題に冠した、いわゆる元号絶句集『文政十七家絶句』（文政一一年〈一八二八〉刊）、『天保三十六家絶句』（天保九年〈一八三八〉刊）がそれに当たる。

これらの詞華集において、同じ詩が掲載されていることは必ずしも多くない。詞華集の編纂に際して、以前に収載された作との重複を避けるのは自然なことであるし、また、自らが投寄する場合、新作を発表しつづけることが期待されていたとも推測される。

なお、菊池五山『五山堂詩話』において取り上げられた柳湾の詩は、人口に膾炙したものと考えられるが[3]、そのなかでもとくに

「高山竹枝（第二首）」は、『五山堂詩話』（巻三）、『鷗盟集』、『文政十七家絶句』に掲載されており、最もよく知られた作の一つと考えられる。柳湾の好尚をうかがうために、ここに示す。

牙梳月様製来新　牙梳　月様にして　製し来りて新たなり
雲鬢当中出半輪　雲鬢の当中に　半輪を出す
清光剛道東山好　清光　剛に道ふ　東山　好しと
何似月梳巧照人　何ぞ似ん　月梳の巧みに人を照らすに

（『柳湾漁唱』）

詩は、まず美しい女性の挿した象牙の櫛を、黒髪のなかに半月が出たかのようであると述べている。その上で、実際の月と櫛との比較に話題を転じている。すなわち、人は、東の山に照る月ばかりを賞美するが、むしろ、夜間、美人の髪に宿る月の方がより美しく人を照らし出すのではないかと述べている。

なお、後述する明治初期の漢詩人森春濤は、この詩を踏まえ、「惆悵月梳今不見／如梳月尚挂東山（惆悵たり　月梳　今は見えず／梳の如き月　尚ほ東山に挂く）」（「高山竹枝詞（第一一首）」『春濤詩鈔』巻八）という詩句を作っている。

柳湾の死後も、大槻磐渓『新選十二家絶句』（嘉永七年〈一八五四〉刊）、石川介斎編『皇朝分類名家絶句』（明治三年〈一八七〇〉刊）などに彼の作品が掲出されている。これらは、名の通った専門の詩家の作品を集めた本格的な詞華集である。また、政治家などの作も収録する、明治期のより通俗的な詩集である『〈才子必誦〉崑山片玉』（明治八年〈一八七五〉）や『今古百家詩文』（明治一一年〈一八七八〉）『〈騒士必読〉今古詩文』（同）などにもその詩が収録されている。

柳湾研究の第一人者である鈴木瑞枝は、『日本漢詩人選集第一三巻・館柳湾』（研文出版、一九九九年）解説において「この後〔筆者注　『天保三十六家絶句』のこと〕に出る詞華集から、彼の詩があまり見当たらなくなってしまった」（二三四頁）と述べ、幕末期以降、人々の間から忘れられたと論じているが、必ずしもそうとは言えないのではないか。

このうち『新選十二家絶句』中の詩は、収載された二〇首中、一三首が『文政十七家絶句』に、四首が『天保三十六家絶句』と重複しており、これらの先行する詞華集を参照しながら詩を採録したと推測される。[4] このほか、『今古百家詩文』所収の三首の詩はすべて『皇朝分類名家絶句』に掲載されているなど、[5] 選ばれる詩の固定化が確認されるが、全体としては、なお柳湾の詩に対する評価に、定まった方向性があったとは言い難い。

## 二　坂口五峰『北越詩話』における柳湾評

柳湾評価の一つの画期となったのが、大正八年（一九一九）の、越後の漢詩人坂口五峰（名・仁一郎、安政六年〈一八五九〉～大正一二年〈一九二三〉、坂口安吾の父）による『北越詩話』の刊行であることは、衆目の一致することであろう。五峰は、越後蒲原の富農の家に生まれ、『新潟新聞』の社主をつとめ、郷里越後の文人の事跡を追い、それを『北越詩話』にまとめた。柳湾につ

いての記述は、その巻四にある。[6]

五峰は、「館氏系譜」などの多くの資料を渉猟しつつ、柳湾の詩人としてのありようについて論じているが、その中でとくに強調されているのが、柳湾の詩における濃密な情感の表現である。五峰の主張は、近世後期の文人頼山陽と幕末の儒者鷲津毅堂による柳湾への評価を踏まえており、その要点は「芬芳悱惻」という言葉によって示されている。以下、こうした理解がなされた背景も含め、五峰の考えを追ってゆく。

山陽は、中国・日本の文人について批評した「論詩絶句二十七首」（『山陽遺稿』巻二）の第二四首において、「時好遷移如循環／百年唯鬧宋明間／誰従唐尾占閑地／西有竹田東柳湾（時好の遷移すること循環するが如し／百年　唯だ鬧（かまびす）し　宋明の間／誰か唐尾によりて閑地を占む／西に竹田有り　東に柳湾）」と詠い、柳湾について、田能村竹田とともに、晩唐の詩を推奨した人物であると述べた。

これに対し、毅堂は、「論詩絶句十二首」（『六名家詩鈔』巻五）の第一〇首において「芬芳悱惻好風情／妙手独弾雲和箏／一様晩唐同雅好／君彝那得比枢卿（芬芳悱惻　好風情／妙手　独り弾ず雲和の箏／一様　晩唐　雅好を同じくするも／君彝〔筆者注　竹田のこと〕何ぞ枢卿〔同注　柳湾のこと〕に比するを得ん）[7]」と叙し、山陽の評価に対し反論を試みた。すなわち、竹田と柳湾とは、ともに晩唐詩を好んだが、柳湾がはるかに優れていると論じ、また、彼の詩について、「芬芳悱惻」であり、雲和の良質な木材で作られた箏の音のようだと述べたのである。

五峰は『北越詩話』中において、山陽と毅堂の詩の両方を引用しつつ、毅堂を支持している。すなわち、毅堂の詩について「平允の見〔筆者注　公平な見解〕、始めて公論と為す」（四〇〇頁）と述べ、「而して芬芳悱惻の目に至りては、這老〔同注　柳湾のこと〕の擅場、他人の企及する能はざるもの」（同）と論じている。

そこで「芬芳悱惻」の語の意味が重要となるのであるが、毅堂らが念頭に置いているのは、袁枚の「人必先有芬芳悱惻之懐、而後有沈郁頓挫之作（人には必ず先づ芬芳悱惻の懐有りて、而る後に沈郁頓挫の作有り）」（『随園詩話』巻一四）などに見られる、強い感情、思いのたけといった意味である。ただ、ここで言う感情とは憤怒や劣情ではなく、詩で述べられるのにふさわしい、悲哀に富んだ美しい情調を指している。[8]すなわち、毅堂は、柳湾を、哀愁を詠う詩人として評価していたのである。

次に見る「過旧送別処（旧（もと）の送別の処を過ぐ）」は、『北越詩話』にも引用されており、五峰の言う柳湾詩の特徴が最もよく表れた作と考えられる。

曾賦銷魂傷別離　曾て銷魂を賦し　別離を傷（いた）む
美人今已隔天涯　美人　今　已に天涯を隔つ
憑誰与説江郎恨　誰に憑（よ）りてか　与（ため）に説かん　江郎の恨み
南浦重過春草時　南浦　重ねて過（す）ぐ　春草の時

（『柳湾漁唱』）

この詩は、江淹「別賦」の「送君南浦／傷如之何（君を南浦に送る／傷めども之を如何せん）」や『楚辞』「招隠士」における「王孫遊兮不帰／春草生兮萋萋（王孫遊きて帰らず／春草生じて萋萋たり）」、同九歌「河伯」の「子交手兮東行／送美人兮南浦（子と手を交へて東行し／美人を南浦に送る）」といった表現を踏まえつつ、かつて友人と別れた地において、再び哀情を催すという内容である。すなわち、むかし友を送った南の岸辺には、別離を象徴する春の草が生い茂っており、ともに哀しみを語らうべきその人ははるか隔たった土地にいると詠っている。

五峰は、柳湾の詩のあり方を、明治期の詩壇において支配的な地位にあった森春濤一派のそれと系譜づけて考えてもいる。すなわち、「明治の初、森春濤、艶麗の詞を唱へて一時を風靡す。亦た柳湾之が先声を為せりと謂ふも可なり」（『北越詩話』四〇一頁）と論じている。

五峰は自身漢詩をよくし、春濤やその子槐南とも交流があった。柳湾の唯美的な表現を、自らが親しんだ詩風の先駆をなすものと位置づけているのである。

## 三　『作詩作文之友』「読詩偶評」における柳湾評

『北越詩話』は大正期以降の柳湾を論じる者にとって、一つの標準となっており、荷風もこの文献を参照している。ただ、この『北越詩話』の史的意味を考えるためには、もう一つそれより前に刊行された資料を顧みる必要がある。

これまであまり言及されたことのない資料であるが、[9]明治三一・二年に『作詩作文之友』（以下、『作詩』とも言う）という雑誌に連載された「読詩偶評」という記事がそれにあたる。この記事は、「虱仙（しっせん）」と「鼠聖（そせい）」という戯号を名乗る二人による対話の形式をとっている。その内容は、江戸時代の漢詩人の詩に対する批評である。具体的には、先に触れた『新選十二家絶句』に収録された、柳湾を含む一二名の近世漢詩人の作について論評している。

戯名を名乗る二人のうち、虱仙については、森春濤門下の詩人であり、明治三〇年代以降、東京漢詩壇の中心的な人物であった岩渓裳川（嘉永五年〈一八五二〉～昭和一八年〈一九四三〉）と分かる。[10]もう一人の「鼠聖」については特定が難しいが、明治期の東京漢詩壇の一人であると推測される。[11]明治期にはなお、漢詩人は、社会的に名を知られていたが、「読詩偶評」は、そのような専門漢詩人たちの手によって書かれたと考えられるのである。

この「読詩偶評」には辛辣な批評が多く、様々な詩人が論難されているのであるが、そのなかで柳湾は例外的に高く評価されている。たとえば、「柳湾の詩の余りに面白ければ、昨夜枕上にて柳湾漁唱三篇を見しが〔下略〕」（『作詩』一一号、一七頁）や「柳湾は不幸にも後人の推重する山陽の如きものなきを以て、詩名は遠く茶山に及ばざるも、絶句抔（ばかり）は夐（はるか）に茶山の上に在るなり」（『作詩』一四号、一二頁）といった発言がなされている。

重要なのは、「読詩偶評」の柳湾評と『北越詩話』のそれとの

間に、類似点が多く見られることであろう。五峰が、柳湾の詩における哀情の表現に着目していることはすでに述べたが、「読詩偶評」においても、柳湾の詩に関して「何んともなき様なれど、其何ともなき中に、言ふべからざるの情韻のあるを妙とするなり」と述べている。[12]

柳湾を春濤一派の詩の先駆をなすものと見ている点も、『北越詩話』と軌を一にする。柳湾の詩を称揚する際には、しばしば春濤の詩が引き合いに出され、[13]また、虱仙には「柳湾は唯予等の最も好む所の調子を早くより為したる」（『作詩』一四号、一二頁）といった発言もある。

このような主張の一致をどのように考えるべきであろうか。すでに述べたとおり、岩渓裳川は春濤・槐南が率いていた詩派の主要構成員であり、五峰は彼らと親しく交っている。むしろ、「読詩偶評」のような認識が東京漢詩壇に共有され、それを受けて五峰が『北越詩話』の論述を行ったと推測すべきであろう。『北越詩話』の記述は、五峰というよりは、東京を中心とする明治漢詩世界の見解とみなすべきなのである。

ただ、「読詩偶評」には、『北越詩話』にはなかった批評の傾向も見受けられる。詩の言葉や構造に対する強い関心がそれにあたる。たとえば、「過旧送別処」詩について、「此詩は一種の風神あり。真に是れ詩の三昧に入るもの」と称賛しているものの、起句の「傷」の字が「銷魂」の「銷」の字と意味の上で重なってしまうことを、瑕瑾として指摘している。

こうした価値観を持つ東京の漢詩人たちが、柳湾の詩のなかでも最も優れた作と考えたのが、次に掲げる「読隋紀（隋紀を読む）」であった。「読詩偶評」では、この詩に全句圏点が振られており、虱仙は「此詩は先づ柳湾が詩中の第一と推さざるを得ざるべし」と述べている。

千里春風隄柳斜　　千里の春風　隄柳　斜なり
龍舟供奉尽宮娃　　龍舟の供奉は　尽く宮娃
君王独悔平陳日　　君王　独り悔ゆ　陳を平ぐるの日
枉翦青溪一朶花　　枉しく翦る　青溪　一朶の花

（『柳湾漁唱』）

詩は、その前半において、隋の煬帝が建設した大運河（隋堤）の様子を詠い、後半において、栄華のただ中にある隋の煬帝の心中について推測を述べている。すなわち、柳たなびく運河には、宮女ばかりを載せた舟が行き来するが、煬帝は内心では、陳の宮女で絶世の美女であった張麗華を殺してしまったことを悔いているのではないか、と論じている。

「青溪」は、陳後主と張麗華が、晋王広、すなわち後の煬帝により斬殺された場所であり、『南史』張麗華列伝には、「及隋軍克台城、貴妃与後主俱入井。隋軍出之、晋王広命斬之于青溪中（隋軍の台城を克るに及びて、貴妃と後主とは俱に井に入る。隋軍、之を出して。晋王広、命じて之を青溪中に斬らしむ）」と記されている。なお、陳後主らが飛び込んだ井戸は、「臙脂井」という名で今日もよく知られている。

この詩について、鼠聖は、「ドヲデス上手なもんですな、青渓一朶の花（張麗華を云ふ）を枉剪せしを悔るとは、絶好議論なり」（『作詩』一一号、一五頁、括弧内は原文のまま）と奇抜な着想を美しい言葉で表現した点を評価している。虱仙は、「承句の妙ありて、後の議論を出すなれば、此句を四句中の最も妙句とする」と論じ、この詩で最も優れた点は、歴史解釈を述べた転結句ではなく、それらをスムーズに導く承句にあると述べている。「読詩偶評」における、言葉や構造への関心が看取される。

## 四　『作詩作文之友』における柳湾以外の江戸漢詩人に対する評価

『作詩作文之友』における柳湾評価の性質をより明らかにするため、柳湾以外の詩人についての評価も見てゆこう。

江戸・江湖詩社の中心人物菊池五山を例にとる。「読詩偶評」において最も高い評価を受けたのは柳湾であるが、逆に最も辛辣な批判を受けたのが、この五山である。とくに鼠聖は「予は五山の詩は大嫌なり」（『作詩』一〇号、一〇頁）と述べ、その詩について「一読すると悪息が紛々鼻を衝けり」「予は五山の詩を読むと、三斗の酸液を嘔出する如し」（同）と強く批判している。[14]

五山の詩に対する批判の多くは、言葉の使い方に関するものである。一例を挙げるならば、五山に「四山堆雪玉玲瓏／月落荒村夜色空／炬火隔渓紅一線／已知猟手到寒熊（四山の堆雪　玉　玲瓏たり／月落ちて　荒村　夜色　空し／炬火　渓を隔てゝ　紅一線／已に知る　猟手の寒熊に到るを）」（「宿山村（山村に宿る）」『今四家絶句』）という詩がある。冬の山村に宿泊した際、谷を隔てた彼方に熊を追う猟師の焚き火を見たというものであるが、この詩に対して、鼠聖は、「此詩は用語措語共に粗笨を免れず」と評を述べ、ほぼ一句ごとに問題点を指摘している。

たとえば、起句の「玉玲瓏」については、天子の庭園や宮廷などに対して使う雅びな語彙であり、荒涼とした山村の冬景色を形容する際に、この言葉を用いることは適当ではないと述べている。また、承句の「紅一線」についても、熟した表現ではなく、「紅一点」の方が自然であると論じている。

措辞や構造に執着する傾向は、議論に使われている詩学用語に注目すると、より明瞭に看取できる。「読詩偶評」では、詩語同士のイメージの連関が十分でない場合、「襯着」しないという表現を用いて、批判がなされている。たとえば、市河寛斎の「菊枕」詩（『寛斎先生遺藁』巻三）の起句「東籬幽味不勝清（東籬の幽味　清きに勝へず）」に対しては、「起承は東籬と幽味、襯着を得ず」（八号、五頁）と記されている。すなわち、まがきを形容する場合は、「秋色」などの語がよりふさわしく、奥深いという意の「幽味」は、あまりに漠然とし過ぎていると言うのである。

また、「字面」という言葉もしばしば登場する。たとえば、柏木如亭「木母寺」（『如亭山人藁』）の起句「隔水香羅雑踏過（水を隔て　香羅は雑踏として過ぎ）」に対しては、鼠聖が「未だ佳ならず」と指摘し、「『雑踏過』の字面は、いかにも十分ならずと

するも、此三字の欠瑩のため、完作ならずとは、少し山人に気の毒なり」（『作詩』九号、一七頁）と応じている。

実際に、明治期東京の漢詩人たちは、詩学における知識の点で、江戸時代の詩人よりも、自身たちの方が進歩しているという、強烈な自負を持っていた。たとえば、鼠聖は、茶山の「柏谷途中」（『黄葉夕陽村舎詩』巻二）や「江良路上」（『黄葉夕陽村舎詩後編』巻七）などの詩を評して、「文化文政より、天保度の詩人などは、此位の詩を作りても、茶山先生と、人々其詩を伝称せしは、随分詩人の気楽な時なりし」（『作詩』一四号、一一頁）と評している。また、頼杏坪の「夜雨宿双白堂」詩（『春草堂詩鈔』巻七）に対して「今日我々が作るには、今少し字句の間にも、工夫をせねばならん所なり」（『作詩』一六号、二頁）と述べ、明治期の詩人たちは、江戸時代よりも、さらに質の高い作を作るための努力が必要であると主張している。

彼らの指摘のなかには、今日から見て、厳格にすぎるものや妥当かどうか疑わしいものもあるとは思うが、明治中期の東京漢詩壇を覆っていた感覚を看取することができる。漢詩人たちは、言葉の用い方に対して敏感であり、それに基づいて詩の価値を決めていた。柳湾はこうした価値観のもとで、きわめて優れた詩人と位置づけられたのである。

## 五　荷風の柳湾評価における独自性

以上のような変遷を経た後に、大正一三年から一四年（一九二四～一九二五）にかけての荷風の柳湾への言及が行われるのである。近世後期以来の潮流を踏まえた場合、荷風の柳湾に対する理解は、どのように見えてくるだろうか。

まず、指摘すべきは、荷風が、『北越詩話』における柳湾の理解に対して反駁を試みている点である。すでに見たように、五峰は柳湾の詩の要諦を「芬芳悱惻」にあると見ていた。しかし、荷風は、『葷斎漫筆』において「柳湾の作中こゝに予の愛誦して措くこと能はざるものは毅堂の評して芬芳悱惻となせしものよりも、寧（むしろ）淡雅清洒なる目白台園居の諸作なりとす」（『全集』第一五巻・四五九頁）と述べ、柳湾の平明な詩を評価すべきであると論じている。いわば明治中期以来、定まりつつあった柳湾への認識に、大きな変更をもたらしたのである。

ただ、同時に目を留めなければならないのは、荷風は、人間関係の点では、明治期の東京漢詩壇と密接につながっているという点である。荷風の父永井禾原が、春濤門下の漢詩人であったことからもそう言えるが、柳湾評価に関して、より重要なのは、「読詩偶評」の執筆者の一人と目される岩渓裳川が荷風の漢詩の師であり、[15]『下谷のはなし』や『葷斎漫筆』を執筆していた時期に、数度面会しているという事実である。すなわち、『断腸亭日乗』大正一二年（一九二三）八月二一日には、「午前三番町二七不動祠後岩渓裳川先生の寓居を訪ひ、春濤詩鈔のことにつきて教を乞ふ」（『全集』第二一巻）と記されている。このほか、大正一四年（一九二五）九月二七日には裳川が荷風宅を来訪、同一五年（一

九二六）三月二九日には書籍返却のため、荷風が裳川宅を訪れている。この年の四月一九～二一日にかけては、荷風の詩を裳川が添削し、添削を経た詩を荷風は日記に書き留めている。明示的な証拠は見出し得ないものの、こうした機会に裳川から柳湾についての高い評価を耳にした可能性は十分考えられるのである。

詞華集における収録状況から考えた場合、荷風が好んだ詩のいくつかは、近世期において注目されていた点に注意すべきであろう。具体的に言えば、荷風が『葦斎漫筆』において言及した「雑司谷雑題」（『柳湾漁唱二集』）、「初冬即事（第二首）」（同）の詩は、近世期の詞華集においてすでに取り上げられている。[16]

とくに荷風が、フランシス・ジャム（Francis Jammes）やポール・フォール（Paul Fort）に近い情趣を感じると述べ、高く評価した「雑司谷雑題」の第二首（鬼子母神の縁日において売られる風車について詠ったもの）及び第三首（すすきで作った梟の玩具が店で売られているについて詠ったもの）[17]については、同じものが、すでに『新選十二家絶句』に採録されている。[18]荷風が注目した作品は、江戸時代においてすでに関心の対象となっていたのである。

これらの詩については、「読詩偶評」においても、「能く作りたり、見る様だねー」（虱仙、第二首に対するもの）、「後の詩の趣向が面白し、一寸出来ん」（鼠聖）、「こんな事も云ひ様で詩となるなり」（虱仙、以上、第三首に対するもの、以上、『作詩』一一号、一七頁）などと賞賛されている。裳川ら明治東京の漢詩人と荷風とでは、柳湾に対する認識の方向性を異にしていたが、具体的にどの詩を好むかという点では、一致する部分もあったと言えよう。

しかし、『葦斎漫筆』において言及された詩の中でも、次に掲げる「秋尽（秋　尽く）」詩は、今回、調査した範囲では、近世後期以降の詞華集における採録が確認できなかった。

静裏空驚歳月流　閑亭独坐思悠悠
老愁如葉掃難尽　蕭蕭声中又送秋

静裏　空しく驚く　歳月の流るゝに
閑亭　独り坐し　思ひ　悠悠たり
老愁は　葉の如く　掃へども尽きがたし
蕭蕭（そくそく）　声中　又た　秋を送る

（『柳湾漁唱二集』）

詩は、老いによって生じる愁いを、はらっても尽きない落葉に喩えている。すなわち、静かなあずまやに一人佇み、はらはらという落葉が散る音を聞きながら、時の流れの早さに思い至ったと詠っている。

なお、寓目し得ない関係文献が存在する可能性はあるが、この詩は、荷風によってはじめて見出された〝名作〟である可能性が高い。

あるいは、荷風が「秋尽」詩に目を留めたのは、西洋文学の知識と関係しているかもしれない。落葉を扱った作品としては、たとえば、「げにわれは　うらぶれて　こゝかしこ　さだめなくとび散らふ　落葉かな」という、上田敏の翻訳で知られる（「落葉」『海潮音』一九〇五年）、フランス象徴派の詩人ポール・ヴェ

ルレーヌ（Paul Verlaine）の「秋の歌」が有名であるが、荷風は『あめりか物語』「おち葉」（『全集』第四巻）において、この「秋の歌」を引用しつつ、「人の身を落葉に比る例は、新しからぬだけ、いつも身にしむ思ひである」と述べている。

また、荷風が『柳湾漁唱』を読んだのは、大正一三年の一一月一〇日前後であり[19]、ちょうど落葉の季節にあたる。こうした様々な要素が重なって、今日最もよく知られることとなった柳湾の作は日の目を見るようになったと考えられる。

## おわりに

本稿では、近世後期以降に発表された詩話や評論、詞華集などを通覧し、柳湾詩に対する評価の変遷について見てきた。

在世時から柳湾は、中晩唐の詩を愛し、自身の詩を錬磨してやまない詩人として知られていたが、岩渓裳川ら明治期の東京で活躍した漢詩人、さらには坂口五峰によって、柳湾の情趣豊かで洗練された詩が喧伝され、その声価はますます上がった。その後、荷風が、柳湾の平明な詩を評価し、柳湾の詩人像の理解に新たな展開をもたらした。

ただ、柳湾をめぐる議論の様相は、やや複雑である。たとえば、裳川らによる「読詩偶評」の柳湾への高い評価と、五峰『北越詩話』におけるそれとは、ともに森春濤からの潮流として理解することができる。ただ、両者の間には、力点の置き方に違いがある。「読詩偶評」の批評は、『北越詩話』のそれと比較すると、より詩の措辞と構成に重きを置いているように思われる。

また、柳湾詩への見解という点では、多くの異なる部分を持つ裳川と荷風とが、詩の道において師弟の関係にあるなど、人間関係を視野に入れると、事態はより錯綜の感を増す。

最後に、現代の選詩状況について確認する。今日の代表的な詞華集には、永井荷風による評価が色濃く反映され、「秋尽」の詩は必ずといってよいほど収載される一方で、近世後期において評価の高かった「高山竹枝（第二首）」や、明治の詩人たちが、柳湾の詩中の傑作と称した「読隋記」詩は採録されていない[20]。

柳湾をめぐる評価の変遷は、何を優れた詩と考えるかの基準が、時代によっていかに異なっているかを、如実に示している。

### 注

（1）館柳湾の詩及び伝記については、本文中に掲げるもののほかに、『館柳湾資料集　附・巻菱湖伝（巻町双書二一）』（巻町、一九七四年）、渡辺秀英『柳湾漁唱註（巻町双書二五）』（巻町、一九七七年）、市川任三『小籟吟藁―館柳湾自筆詩稿』（太平書屋、一九八一年）、鈴木瑞枝「館柳湾・人と詩」（『柳湾漁唱』太平書屋、一九八一年）徳田武『江戸詩人選集第七巻　野村篁園・館柳湾』（岩波書店、一九九〇年）、鷲原知良「館柳湾の晩唐詩受容―皮日休陸亀蒙の摂取例を中心に」（『和漢比較文学』二三号、一九九九年八月）、鈴木瑞枝『日本漢詩人選集第一三巻・館柳湾』（研文出版、一九九九年）、石川忠久『茶をうたう詩―『詠茶詩録』詳解』（研文出版、二〇一一年）などを参照した。なお、『柳湾漁唱註』は、柳湾詩の全注解であり至便だが、いくつかの詩について解釈

を改めた。

（2）『五山堂詩話』各編の刊行年については、『江戸の詩壇ジャーナリズム―「五山堂詩話」の世界』（角川書店、二〇〇一年）、二五頁を参照した。

（3）本稿で取り上げたもののほかに、「読農書（偶懐）」「雨夜宿小阪駅」「詠手炉」「山村」（以上、巻三）、「金山雑詠」（補編巻六）が収録されている。

（4）『新選十二家絶句』中、『文政十七家絶句』と重複して収録されているものは、「寄懐山田元凱」「過旧送別処」「謾題」「読隋紀」「上金輪寺後閣（第二首）」「寄致遠」「栗軒偶題（第一～五首）」（いずれも『柳湾漁唱』所収）である。また、『天保三十六家絶句』と重複して収録されているものは、「江上春霽」「和致遠見友人別妓」「夏日雑題（第一首）」「雑司谷雑題（第二首）」（いずれも『柳湾漁唱二集』所収）である。このほか、

（5）「夏日雑題（第二首）」、「弄椀珠」（いずれも『柳湾漁唱二集』）「老狸鼓腹図」（『柳湾漁唱三集』）である。

（6）五峰が柳湾に注意を払うようになった時期は、明治一七年（一八八四）に遡る。この年、五峰は、『林園月令』の稿本を入手し、「林園月令稿本歌」（『五峰遺稿』巻上、一九二五年）を制作している。なお、『北越詩話』は、『新潟新聞』に連載された記事をまとめたものであり、同書刊行以前に、五峰は柳湾について情報発信を行っていたと考えられる。

（7）この詩には異同があり、『湖山楼詩屏風三・四集』（明治一九年〈一八八六〉刊）では、「君彝那得較枢卿」とする（傍線部が異同箇所）。

（8）森春濤「詩魔自詠（第二首）」にも「平生不必患才多／奈此芬芳悱惻何（平生　必ずしも才の多きを患へざるも／此の芬芳悱惻を奈何せん）」という詩句があり、同じ意味であると思われる。

（9）「読詩偶評」は、『作詩作文之友』八号（明治三二年〈一八九九〉三月）～二〇号（同一二月）に連載されている。その一部については、拙稿「「鞭声粛粛」の明治―頼山陽「題不識庵撃機山図」詩と詩吟・剣舞」（『アナホリッシュ国文学』三号、二〇一三年六月）において論及した。

（10）注五拙稿において触れているが、虱仙は、自身が服部南郭の詩についての評を『精美』誌上の「骨董美」において発表したと述べている。この「骨董美」は、裳川の手になるものであり、「虱仙」が裳川であることが分かる。

（11）鼠聖については、明治東京漢詩壇の中心人物であった森槐南が若年期に書いた文章と、語彙・内容の両面で酷似していることが注目される。「読詩偶評」（一〇号、一三頁）において、鼠聖は「五山の詩は腐気満紙、其佳となすものは、皆油腔滑調にして、絶て清新と云ふ所なし」と述べているが、森槐南の槐南の「詩問」（『新新文詩』二集、明治一八年六月）には、「惜ヒカナ、文化文政ノ諸先輩、競テ律絶ヲ以テ相標榜シ、務メテ模擬剽窃ノ弊ヲ矯セント欲シテ、油腔滑調ノ害ヲ貽スヲ知ラズ」（傍線部の語彙が一致）と記されている。なお、裳川一人が対話形式で執筆した可能性もある。

（12）この評は、「南浦重過春草時（南浦　重ねて過ぐ　春草の時）」（「過旧送別処」結句）や「月満桃花水漲時（月満ち　桃花　水漲るの時）」（「和致遠見友人別妓」結句）などの表現について評したものである。

（13）たとえば、柳湾の「読隋記」について、春濤の「詠史二首（隋二世）」（『春濤詩鈔』巻四）を引き合いに出し、「共に好議論となすべし」（『作詩』一一号、一五頁）と述べている。また、柳湾の「和致遠見友人別妓」詩を論じる際、「春詩百題存二十五（第六首・春水）」（『春濤詩鈔』巻四）を挙げ、「情韻相似て双璧となす

べきもの」と評している（同、一六頁）。

（14）ただし、虱仙は、「そんなに云ふ程、五山の詩は悪くはないて」（『作詩』一〇号、一一頁）、「五山もそんなに棄てたものにもあらず、未だ好き詩もあるべし」（同、一二頁）とやや批判の調子を弱めている。

（15）『断腸亭日乗』中、最も早い柳湾関係記事は、大正一三年二月一一日の「電車にて牛込横寺町二十三番地長源寺に至り、館柳湾の墓を展す。寺の媼の談に柳湾一家の墓、及森東郭、岡部平仲の墓は先年東京市役所より保存の命ありしと。今は皆無縁なり」（『全集』第二一巻）というものである。この時期は、『下谷のはなし』執筆時期にあたっており、近世後期の漢詩人について調査するなかで、荷風は柳湾を知ったと考えられる。

（16）荷風は「是より先、予は贅を岩渓裳川に執り、漢詩の作法を学ぶ」（『断腸亭日乗』中の「自伝」『全集』一五巻、四八六頁）と述べている。荷風の漢詩歴や裳川との関係については、池澤一郎『荷風俳句集』解説（岩波書店、二〇一三年）に詳しい。

（17）「雑司谷雑題」第二首は以下のとおり。「鬼母堂前満路塵／幾群香火晩帰人／風車斜挿籃輿上／紅緑渾渾転彩輪（鬼母堂前　路に満ちる塵／幾群の香火　晩帰の人／風車　斜めに挿す　籃輿の上／紅緑渾渾転彩輪　紅緑　渾渾として　彩輪を転ず）」。四つ手籠の上に挿された風車の赤と緑がくるくると回って色鮮やかな様を言う。第三首は以下のとおり。「孟冬之月雉為蜃／幾歳疑懐今始休／一笑西邨寺前路／芒花入店化鵄鴞（孟冬の月　雉　蜃（はまぐり）と為る／幾歳か疑懐すれど　今　始めて休（や）む／一笑す　西邨寺前の路／芒花　店に入りて　鵄鴞に化すを）」。起句は、『礼記』「月令」の「雉入大水為蜃（雉　大水に入りて蜃と為る）」を踏まえる。すなわち、「『礼記』の、キジが大ハマグリとなったとは分からない説明だと思っていたが、今日、鬼子母神の縁日ではじめて理解できた。ここでは、ススキがミミズクに化けているのだから（すすきで作った梟の玩具を指す）」と詠う。

（18）「雑司谷雑題」は全六首の連作詩であるが、どの詩篇を取り上げられるかは、詞華集によって異なっている。『天保三十六家絶句』に第一、二首が、また、『北越詩話』に掲載された三浦桐陰による選詩録中に第三首が採られている。

（19）『断腸亭日乗』には、大正一一年一一月一〇日の条に「枕頭に柳湾漁唱あるを見、把りて第一集を読み、第二集の半ばに及ぶ」（『全集』第二一巻）、同一一日の条に「枕上柳湾漁唱を読むで眠る」（同）とある。

（20）たとえば、『新釈漢文大系四八』（明治書院、一九七二）『江戸詩人選集・第七巻　野村篁園・館柳湾』（岩波書店、一九九〇年）、『日本漢詩人選集・第一三巻　館柳湾』（研文出版、一九九九年）には、「高山竹枝（第二首）」、「読隋記」の二詩は収録されていない。

底本について

諸資料については、以下を使用した。

『采風集』、『五山堂詩話』、『文政十七家絶句』、『天保三十六家絶句』

『六名家詩鈔』、『皇朝分類名家絶句』、『今四家絶句』…『詞華集日本漢詩』（汲古書院、一九八三～八四年）を使用。

『柳湾漁唱』、『寛斎先生遺藁』、『黄葉夕陽村舎詩後編』、『同後編』、『春濤詩鈔』…『詩集日本漢詩』（汲古書院、一九八五～一九九〇年）を使用。

『北越古今詩選』、『新選十二家絶句』、『今古百家詩文』、『〈才子必誦〉崑山片玉』、『〈騒士必読〉今古詩文』…国立国会図書館蔵本を使用〈複写及び国立国会図書館デジタル・コレクションにより確認〉。

『鴎盟集』…新潟大学図書館（佐野文庫）蔵本を使用（複写）。

『篋中集』…早稲田大学図書館蔵本を使用（早稲田古典籍データベースより確認）。
『如亭山人藁』…『如亭山人集』（太平書屋、一九七九年）中の複製を使用。
『随園詩話』…『中国古典文学理論批評専著選輯〔第二版〕』（人民文学出版社、一九八二年）を使用。
『作詩作文之友』…東京大学近代日本法制史料センター（明治新聞雑誌文庫）本、及び架蔵本を使用。
なお、荷風の文献は、すべて『荷風全集』（岩波書店、一九九三年）に拠った。

付記　ご教示を賜りました柏木隆雄氏、また、貴重な資料の閲覧・複写をお許しいただいた国立国会図書館、新潟大学図書館、東京大学明治文庫に深謝申し上げます。
なお、本稿脱稿後、大沼枕山に「今茲甲辰四月、柳湾館翁没矣。方外友密乗上人、命画師某摸写翁真、請花亭岡本君、題詩于上頭、会余及諸友而展拝之。即次花亭君韻（今茲甲辰四月、柳湾館翁没せり。方外の友密乗上人、画師某に命じて翁の真を摸写せしめ、花亭岡本君に請ひて、詩を上頭に題せしめ、余と諸友とを会して之を展拝せしむ。即ち花亭君の韻に次す）」詩（『枕山詩鈔』巻中）や「春初絶句、倣柳湾老人（春初絶句、柳湾老人に倣ふ）」詩（『枕山詩鈔二編』巻上）などの柳湾に言及した詩があり、荷風の柳湾の詩に対する関心を理解するためには、こうした枕山の作を検討する必要があるとのご指摘をいただいた。これについては、当然考えるべき問題であったが、本稿では触れ得ていない。後考を期したい。池澤氏のご教示に深謝申し上げます。
本論文は、国文学研究資料館「歴史的典籍に関する大型プロジェクト」共同研究（公募）「日本漢詩文における古典形成の研究ならびに研究環境のグローバル化に対応した日本漢文学の通史の検討」の成果の一部である。

（ごうやま・りんたろう　本学大学院准教授）